

# 小池辰雄記念図書室だより

2014.2.1(土)NO.17 千葉市若葉区都賀 3-24-8-4F 小池辰雄記念図書室発行

## 1. 小池辰雄記念図書室のナビゲーター(案内人)

松井康男(友の会会長)

2011年に小池記念図書室がオープンして早(はや)3年が経つ。最近、来訪者の数が伸び悩み、減少気味であるという。これはまことに「もったいない話」であり、宝の持ち腐れとわたしは感じる。

記念図書室の何万冊もの小池先生の蔵書は、先生が70年以上の信仰生涯の歩みの中で、内村鑑三先生の書物を手始めに、こつこつ買い求められた貴重な本が多い。大正中期から平成まで、小池先生の関心、問題意識のままに積み重なったものである。近代日本と西欧の、キリスト教を視点とした精神文化史(近代以前の仏教史もふくめて)の最善の精華が展示されている。

特に、内村鑑三先生の、絶えず本物の霊的信仰と真理を求道する不滅の改革者精神が、強い衝撃と影響を小池先生に与えたこと、さらにその改革者の魂は脈々と水谷先生にも流れ込んでいることを多くの方々々が直感されることをわたしは希望する。それで浅学非才を恥じながらも、主に「小池辰雄を読む会」の参加者の中で希望される方に、読書会のあと、4階図書室の各コーナーを小池先生の信仰の歩みに即して自分の理解の範囲で小時間、ご案内(ナビゲート)したいと願っている。多くの方々のご参加をお待ちいたします。



## 2. 全国の「読む会」

読書会に参加して 三ツ木朋代(札幌)

札幌での読書会は、金曜日の夜(月1回)川沿教会で行われていましたが、2013年3月から11月まで6回、北海道セミナーが開催されたのに伴い、セミナー参加者の多く(札幌・小樽・帯広)の方々が出席されました。セミナー終了後、会場は川沿教会に戻りま

したが、土曜の夕礼拝前に変更となり、礼拝出席者は読書会から参加しています。

読書会を通し、私の中で平面的だったイエス様の実像が、小池先生の文章、水谷先生の解説によってわかりやすく、立体的になってきます。特に昨年受洗したAさんは「今まで理解できなかった言葉の意味が良く分かってストンと心に落ちてくる」と読書会を心待ちにしています。私も事前に一読し、この難しい文章から、水谷先生の解説によって、どんなイエス様の姿が私の前に現れてくるのか楽しみです。

## 小池辰雄を読む会

### ●余市

2014年2月2日(日)13:30~15:00

2014年3月9日(日)13:00~15:00

余市郡余市町豊丘町 370-9 恵泉祈りの家

\*会費:無料(自由献金)

\*連絡先:0135-23-9222(木下)

### ●札幌

\*2月はお休みします。

### ●帯広

### ●北見

\*しばらくお休みします。

### ●都賀

2014年2月15日(土)10:00~12:00

2014年3月22日(土)10:00~12:00

千葉市若葉区都賀 3-24-8 都賀プラザ 5階

\*会費:1000円

\*連絡先:043-235-3815(石丸)

\*準備のため、出席のご連絡をお願いします。

### ●神戸

2014年2月23日(日)14:00~15:30

神戸市中央区磯上通り 4-1-12 神戸ハイブルハウス

\*会費:500円(自由献金あり)

\*連絡先:090-9256-4841(田中)

\*隔月開催のため、3月はありません。

\*予習不要・初心者歓迎

図書室便りは偶数月発行です。

本図書室は献金で運営されています。



### スピーリの家庭

昨年二月頃、「小池辰雄記念図書室」から、ヨハンナ・スピーリ『神はわが友』の小池辰雄訳をもっていないかと電話があった。森田安一さんというスイス史の専門家の方が問い合わせしてきたという。うかつにも私はその本の存在すら知らなかった。スピーリは『ハイジ』の作者として有名な十九世紀のスイスの女流作家で、私が小学校五年生のとき、父が訳した『バラの乙女』という本を私たち子ども一人一人にサインして手渡された記憶はあり、それは記念図書室に収納されている。しかし『神はわが友』はない。森田さんにそう伝えてしばらくすると、なんと森田さんから『神はわが友』の原本コピーが送られてきた。わざわざ国会図書館へ足を運び、コピーを取ってくださったのだった。それは太平洋戦争終了の翌年、昭和二一年四月に新教出版社から発行されたものだった。

私は、初めてこの物語を読んだ。『ハイジ』と同じアルプスの山に暮らす貧しい少年（六歳）と少女（五歳）が、食べる物がなく倒れた母のために山を下りて、街のホテルで歌を歌う話だった。その歌は、日頃母から教えられていた祈りの歌で、その最後を、

げに神をだに友としもたば

助けあり、到るところに

ということばで締めくくられている。子どもの本にしては分かりにくい文語体だが、「神さまを友だちとして生きていれば必ず助けてくださる」と歌ったのだ。酒宴中だったドイツの青年たちはこの歌に心動かされ、倒れた母親のために子どもたちが山を下りてきたことを知って、山に母なる女性を助けに行くという至極単純な物語だったが、私は不覚にも涙を流してしまった。

昭和二一年といえば、私はちょうど六歳、一つ上の姉が七歳。この物語の兄妹に似ていた。少年少女の神を讃える歌声は天使のようであったろう。父・辰雄は、私たち四人の子どもに「神を友に生きてほしい」と願って訳していたのだ。陸軍の学校に勤めていた辰雄は終戦と同時に失業、わずかな昭和医科大学講師料で六人家族を養わなくてはならなかった。米びつに一粒の米もなくなったことが度々ある。そんな時のこの仕事は、なんと一万部の初版、辰雄は今のお金にして二百万円くらいの印税を得た。神さまは間違いなく助けてくれたのだった。

これは小池辰雄にとって記念すべき一冊ではな

いか。ぜひ小池記念図書室にオリジナルがほしい。早速、ネット古書店で検索したが、さすがにどこにも売っていなかった。そのかわり、平田ルツ子さんという綾瀬教会の牧師のサイトに「神はわが友」も「バラの乙女」も全文掲載されていたので驚いた。ルツ子さんは小学生時代に教会のオルガン弾いていて、そのご褒美に単行本『バラの乙女』を牧師さんからプレゼントされ、以来、困窮したときはいつも同書に掲載されていた「神はわが友」を心に銘じて乗り切ってきたという。

私はあわてて図書室にあった『バラの乙女』を開いてみると、この本にはちゃんと『神はわが友』も掲載されているではないか。つまり、昭和二五年に刊行されたとき、四年前の「神はわが友」をまるまる収録していたのだった。はからずも一度も父親の訳した本を開いたことがなかった不肖の息子が露見してしまった。

私は、父が願ったような信仰者にはならず今日まで生きてきたことを思いつつ、森田さんが送ってくれた『神はわが友』の訳者「まえがき」を読み直してみた。

終戦時、辰雄は四二歳。日本人には宗教改革が必要であるとして、こう書いている。「神を無二の友ともたず、生活の中心にもたないところに、宗教もなく信仰もありません。しからばそういう改革はどこから始めねばなりませんか。まず家庭からでなければなりません」。

そう、辰雄は結婚当初から宗教改革を決意して家庭を作ってきたのである。結婚から一二年、私の記憶ではわが家は絵に描いたような、人のうらやむクリスチャン家庭だったと思う。辰雄は、まぎれもなくスピーリの描いたような家庭作りに成功した。

にもかかわらず、私はここに唐突に辰雄の不安を感じた。子どもたちに向かうよりむしろ、母親に向かっている。模範的クリスチャン家庭づくりの成功者はここで何を考えていたのだろうか。

そして昭和二五年——そういえばこの年の十一月、辰雄は九州阿蘇山で霊のバプテスマを受け、劇的な信仰のコペルニクス的転回を果たしたのではなかったか？